

いわ くら じょう
 岩 倉 城 遺 跡

調査の経過

岩倉城遺跡は戦国時代の岩倉城の時代を中心とする遺跡で、岩倉市下本町から大市場町にかけて所在する。岩倉城は五条川中流域右岸を中心に標高約10mの自然堤防上に立地する。県道萩原多気線建設に伴う事前調査として昭和63年1月より発掘調査を実施し、調査面積は62年度760㎡、63年度1,470㎡、本年度5,240㎡である。前年度までの調査で、岩倉城の西側の二重堀の規模・構造や本丸内を区画する溝等が確認されている。

本年度の調査では、B・C区でそれぞれ幅約20m・深さ7m、幅約12m・深さ3.5mの堀が確認され、63年度調査の堀とほぼ同規模であり、東の二重堀にあたると考えられる。さらに、五条川左岸のE a、F区でも幅約8～9m深さ約2.5mのほぼ同規模の堀が確認されたことから、岩倉城の規模が従来考えられてきたよりも拡大する可能性が高い。また、A区では本丸内を区画する溝2条が確認され、特にSD03（幅約3m・深さ約1.7m）は館を区画する溝で、62年度調査のSD01、SD03に続くものと考えられる。さらに、SD03の東側一面に落城時のものと考えられる炭化物、焼土が柱穴等多数の遺構の直上で確認された。

遺構を確認できなかった時期もあるが、弥生時代から戦国時代の土器が出土し、I期：弥生時代、II期a：古墳時代前期、II期b：古墳時代後期、III期：奈良時代、IV期：平安時代、V期：鎌倉・室町時代、VI期：戦国時代という岩倉城遺跡の時期区分を想定した。

(山仲廣司)



第1図 調査区位置図 (1/5000)

調査の概要

A・B・C区の調査

A・B区 I期の遺構としては、弥生時代後期の竪穴住居を8軒検出した。

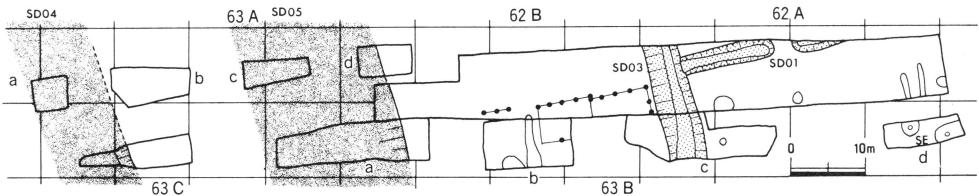
VI期の遺構については、大小の溝、多数のピット、土坑を検出した。この中でSD01は幅20m、深さ7mの箱堀りの溝で、堀と呼ぶにふさわしいものである。この溝は63A・B区で確認されたSD05と規模、埋土等が似ており、両者で二重堀の「内堀」を構成するものと考えられる。遺物は当該期の陶磁器片がごく微量出土した。次にSD03は幅3m、深さ1.7mの断面V字形の溝で、掘り返しが一度認められる。遺物は上の新しい溝から大量の土師皿が、下の古い溝から下駄、箸等の木製品が出土している。この溝についても、62、63B区で確認されたSD02と、遺物の出土状況、掘り返しのある点など類似点が多く、両者は本丸内の区画といった同様の機能を持つものと考えられる。最後に1つ注目されるものは、遺構の直上で炭化物、焼土の面的な広がりを確認したことである。特にSD02と03の間で顕著に見



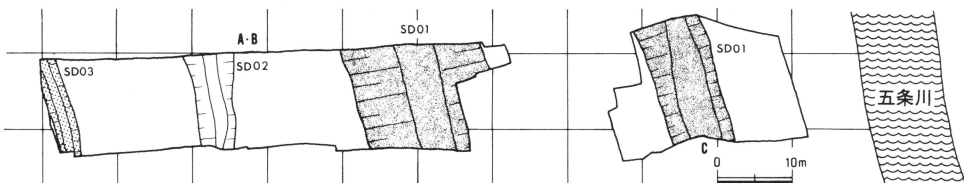
A・B区 SD01 (西から)



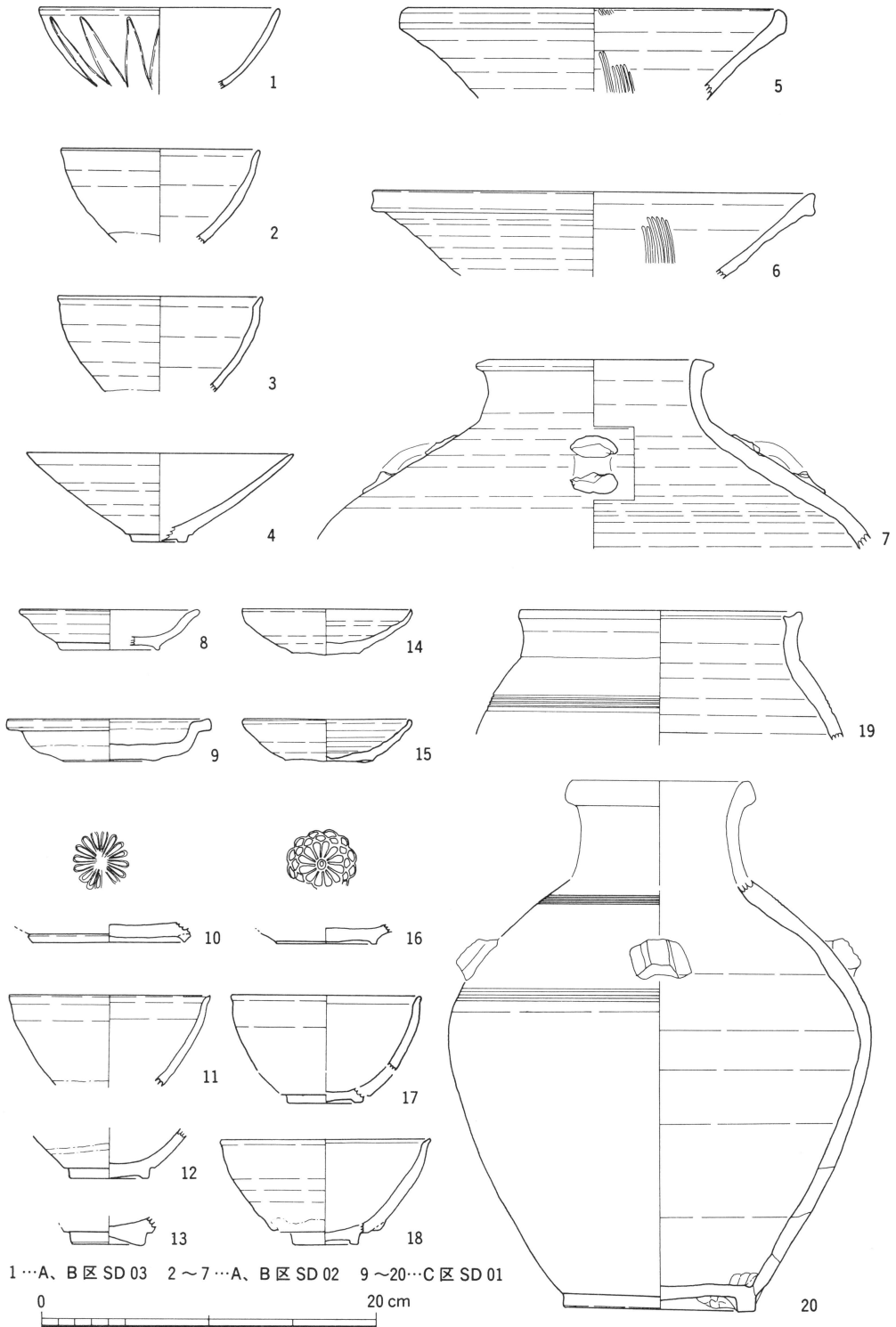
A・B区 SD03遺物出土状態 (西から)



第2図 昭和62・63年度VI期遺構配置図 (1/1000)



第3図 A・B・C区VI期遺構配置図 (1/1000)



第4図 A・B・C区VI期出土遺物（1/4、20のみ1/6）

られ、遺構の埋土にも多く含まれていることから、火災にあった可能性が高く、文献史料とあわせて落城時の様子を考える一つの手がかりとなりそうである。

C区 I期の遺構としてSX01、02を確認した。これは径が不揃いの円礫を不定形及び带状に集積したものであるが、遺物がほとんど出土していないことや、他に遺構が存在しないこともあり性格は不明である。



C区 SD01 (北から)

VI期については南北に走る大溝を確認した。SD01は幅13m、深さ3.5mの箱堀りの溝で堀と考えるとよく、63A・B区のSD05とともに二重堀の「外堀」を構成するものと考えられる。遺物は、播鉢、天目茶碗、四耳壺等、当該期の遺物が出土している。なお、このSD01とA・B区SD01の間約20mは無遺構であり、土塁等の存在も考えられる。 (金子健一)

D・E・F区の調査

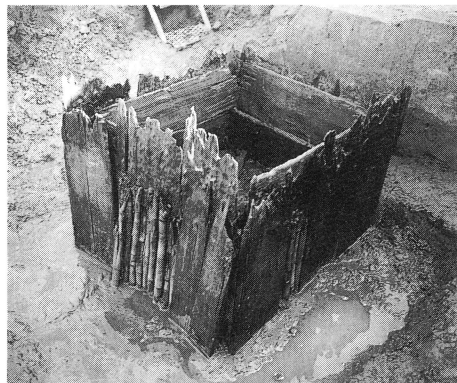
I期 F区において、弥生時代後期の方形周溝墓を1基検出した。

II a期 Ea区下層において、古墳時代前半期の土器集積遺構 (SX01) 及び井戸状遺構 (SE01) を検出した。各遺構からは、壺・小型丸底土器・器台・S字甕など比較的まとまった土器が出土しており、当該期の土器編年を考えるうえで貴重な資料になると思われる。また、包含層中からではあるが、駿河系土器の特色を持つ土器片も出土している。

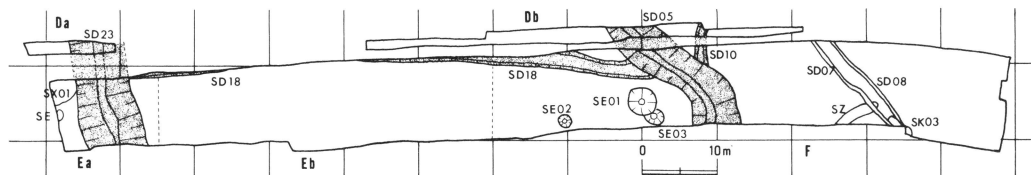
II b・III期 遺物の出土はみられたが、明瞭な遺構は確認できなかった。

IV期 F区において、土坑1基 (SK03) と溝2条 (SD07-SD08) を検出した。

V期 F区において、井戸を3基検出した。SE01は径3.7m、深さ2.5mを測る。1.1m四方



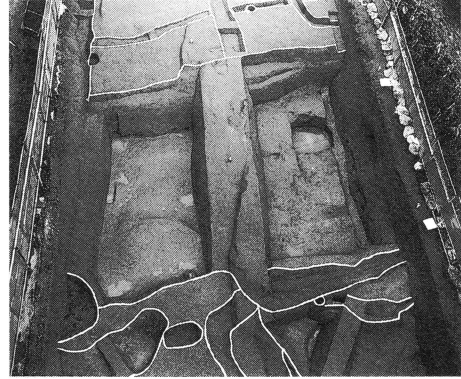
F区 SE01 (北西から)



第5図 D・E・F区遺構 (1/1000)

の井戸枠、曲物等内部構造が良好な形で残存しており、13世紀後半頃に比定される灰釉系陶器が多量に出土した。SE03からは遺物の出土はみられなかったが、01より切り合い関係からみて若干先行すると思われる。また、SE02からは14世紀前半の灰釉系陶器が出土した。

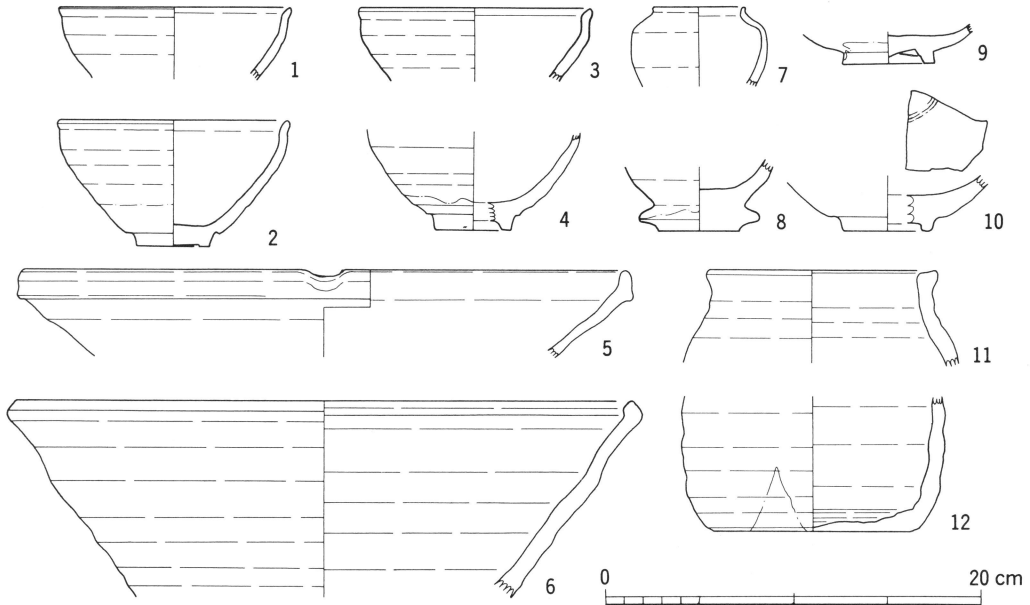
VI期 Da・Ea区においてSD23、Db・F区でSD05という二本の大溝を検出した。SD23は、幅9m・深さ2.5m、SD05は発掘区中央で大きく屈曲するが幅8m・深さ2.3m程の規模を有する。溝の断面は、共に緩やかなV字形をしており、滞水状況は認められなかったが、岩倉城の施設を囲む堀である可能性が高く、当該期の陶磁器片を中心とした遺物が少量出土した。他の遺構としては、東西方向に延びる幅2.5m・深さ0.8mのSD18、SD05に切られるSD10等を確認した。(服部信博)



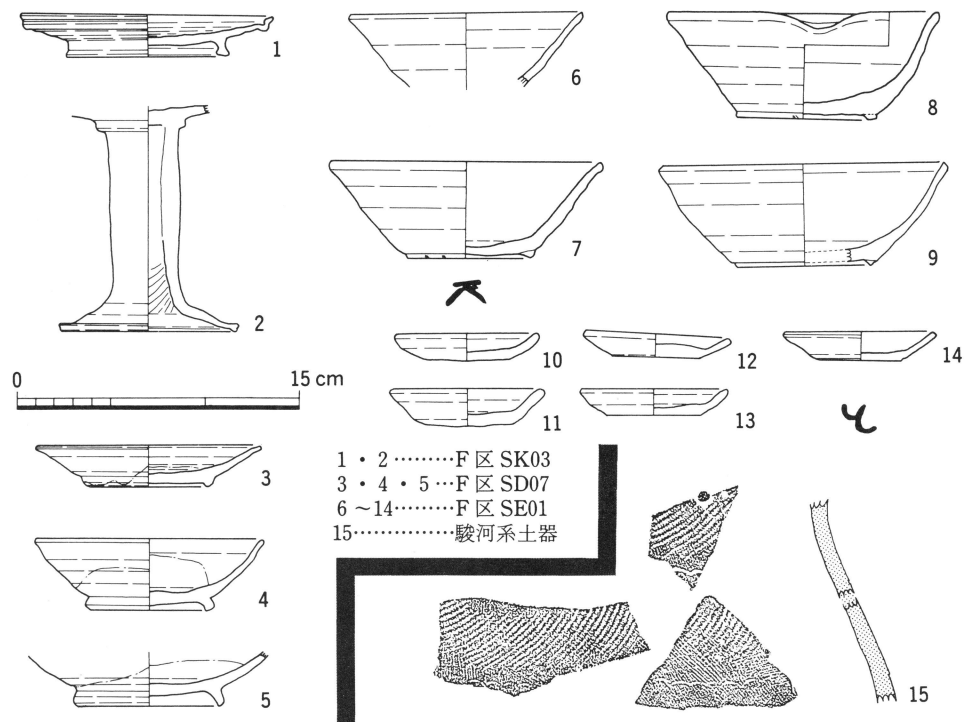
Ea区 SD23 (西から)



F区 SD05 (北から)



第6図 D・E・F区VI期出土遺物 (1/4) 1～3・5・7・8……SD05、4・6～11……SD10
9・10・12……SD23



第7図 D・E・F区 II a・IV・V期出土遺物（1/4、15のみ1/3）

まとめ

今年度の調査成果を時期ごとに整理していく。

I 期（弥生時代）

岩倉市の周辺は当該期の遺跡が、数多く見られ、注目されてきた地域であるが、その実態はほとんど判明していなかった。昨年度、及び今年度の調査において、住居と周溝墓が確認され、僅かながらではあるが、集落の一端を明らかにすることができた。

II 期（古墳時代）

今回、古墳時代前半期の土器が遺構に伴って一括して出土した。これらの資料は、研究の立ち遅れている感のある尾張地方の古墳時代土器研究に、大きな影響を与えるであろう。

V 期（鎌倉～室町時代）

井戸を検出したことによって、発掘区周辺に中世の集落が広がっていたと考えられる。

VI 期（戦国時代）

幻の城とされ、実像がほとんど不明であった岩倉城であるが、3年間の調査によって、断片的ではあるが、現実に存在した城として語るができるようになってきた。しかし調査区域は、岩倉城全体からみればほんの一部にすぎず、到底、全容を把握するには至っていない。今後、城郭のみならず、城下町の存在も含め、文献史料、地籍図の検討等、総合的な研究が望まれる。

（服部信博・金子健一）